

「胃 X 線診断の考え方と進め方」第 2 版

北海道対がん協会検診センター副所長 吉田 裕司 著
 国立がんセンター名誉院長・(財)早期胃癌検診協会理事長 市川平三郎

JR 仙台病院消化器内視鏡センター長
 仙台オープン病院名誉院長

望 月 福 治

好評のベストセラー「胃 X 線診断の考え方と進め方」の 10 年ぶりの改訂版である。内容とともに写真の多くが差し替えられ見やすくなった。胃 X 線診断と言うと、まず、X 線透視と撮影が行われ、次にフィルムの読影の段階を経て、最後に鑑別診断へと進むのがお定まりのコースであり、多くの成書はこれに準じている。本書の特徴はこれまでにみられない型破りの構成にある。すなわち、序論に相当する第 1 章の「胃 X 線診断の成り立ち」に引き続き、意表をついて胃 X 線鑑別診断の章から始められる。しかも、この項は説得力があり興味あふれる内容となっている。ドラマに例えれば、まず核心となる事件が紹介され、読者を一気に物語に誘い込み、やがて登場人物の紹介、次いで物語の背景と展開という一連の手法に似ている。いずれにしろ本書がまず鑑別診断という実践的で具体的な診断法を先行させ、内容も単刀直入に核心に入っていくのでとけ込みやすい。更に、この章の胃疾患各論では、随所に佐野の分類を中心にした鑑別診断の方法

論が展開されている。この分類は肉眼所見を重視したものであり、今日でもなお X 線および内視鏡診断の基本になっていることが少なくない。例えば、IIa+IIc 型早期胃癌については、この分類を基本に早期胃癌の肉眼的所見と、これを反映する X 線像がわかりやすく示されている。また、IIc 型早期胃癌の鑑別のポイントについても形、大きさ、深さをはじめ、蚕食像などの辺縁の変化、アレアの変化と顆粒不揃い度などの内面の変化、converging fold の読みなど、X 線診断の基礎的な事項について明快な解説がほどこされている。X 線ばかりか内視鏡診断の基礎にもなりうるものである。初心者には新しい知識として、消化器を専攻するものにとってもこれまでの知識を整理するうえでも大変参考になるであろう。

次の「読影の基本」では、著者らの言う X 線診断の理論的分析である読影に必要な病変と対応する X 線画像の成り立ちと現れ方が克明に述べられている。「胃 X 線撮影法」の項ではルーチン技術と精密撮影技術

とに分けて述べられ、二重造影法の背臥位の正面・第 1 斜位・第 2 斜位、半立位造影法などの撮影の際に、体のローリングの仕方、それに伴う胃の中のバリウムの移動の違いと画像の成り立ちなどが具体的に示され実務的である。私はだいたい前の論文の中で、X 線診断は難しく、検査に汗を流し、取り組む若きドクターがこれから出るだろうかと思いついてきた。しかし、消化管の X 線診断については消化器病学会(1997, 福岡)でパネルディスカッションとして取り上げられ、「胃と腸」誌でも「胃癌の診断に X 線検査は不要か」という特集が組まれている。X 線診断に対する関心度はいまだ根強いともと思われる。本書は基本に忠実に、理論的な分析を軸とした X 線診断の最良の入門書でもあり専門書でもある。消化器病に携わる一人でも多くのドクターに一読をお勧めしたい。

● B5 頁 346 図 114 写真 272
 1998 定価(本体 12,000 円+税)
 〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)